

村野藤吾の家具について

すでにこの収蔵品紹介の連載ページでもご紹介したように、大阪を中心に関西で活躍し、日本の近代建築を代表する建築家の一人である村野藤吾（1891～1984年）のおよそ5万点を超える建築図面資料一式が、村野の没後の1994年、その遺族から、さまざまな経緯と関係者の尽力によって、美術

工芸資料館に寄託された。そして、建築図面の整理が完了したことから寄贈の扱いとなり、1996年12月20日付で最初の登録が行われて以来、順次、収蔵品となって登録されて今日へと至っている。その数は、2011年3月31日現在、約2万8千点を数えるまでとなった。これらの図面は、そのほとんどが実施設計図と呼ばれる建築工事を発注するために描かれたいわば建築の制作図であり、建築設計のプロセスと内実を伝える貴重な資料ばかりである。資料館では、1999年、寄贈に合わせて学外

の委員を交えて組織された「村野藤吾の設計研究会」と企画共催する形で、収蔵品となったこれらの図面を広く一般に公開すべく、2000年から2008年までの10回にわたり、毎年、展覧会「村野藤吾建築設計図面展」を開催し、その記録として図録も発行してきた。

村野藤吾は、1918年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、先ごろ取り壊された「大阪ビルディング本館」（1925年）や「日本綿業会館」（1931年）などの建築作品で著名な渡辺節建築事務所に入所し、1929年に独立、1984年に93歳で亡くなるまでの半世紀以上もの間、戦前戦後を通じ

て幅広い設計活動を続けた建築家である。代表作としては、すでに国の重要文化財に指定されている「宇部市民館」（1937年）、「世界平和記念聖堂」（1954年）、「高島屋東京店増築部分」（1952～65年）の3つの建物のほか、「森五商店東京支店」（1931年）、2002年に取り壊された「心齋橋そご

う」（1935年）、近年閉鎖されてその存続が危ぶまれる「大阪歌舞伎座」（1958年）、「都ホテル佳水園」（1959年）、「日本生命日比谷ビル」（1963年）、「西宮トランプスチヌ修道院」（1969年）、「迎賓館（旧・赤坂離宮改修）」（1974年）、「箱根プリンスホテル」（1978年）などがある。

こうした有名な建築作品に代表されるように、建築家としての輝かしい活動を続け、優れた建築作品を遺した村野藤吾だが、実は、流れゆく時代の中で、人知れず取り壊されてしまった建物も多い。今回ここで紹介する収

蔵品は、村野が設計した今はなき小さな喫茶店のためにデザインした家具である。

その小さな喫茶店とは、1956年に大阪の心齋橋筋商店街のアーケードに面した場所にオープンした「心齋橋プランタン」である。大丸やそごうにも程近い賑やかな場所にあいながら、その静かで落ち着いた店内は、どこかヨーロッパのカフェのような香りを漂わせて、多くの人々に愛されていた。けれども、2003年6月、惜しまれつつ、およそ半世紀近くに及ぶその歴史に幕を閉じ、閉店してしまう。その後、関係者から美術工芸資料館へと寄贈されたのが、実際に店内で使用されて

いた家具類である。もちろん、建物自体も村野藤吾が設計を手がけている。戦前に多くの客船のインテリア・デザインを手がけた豊富な経験からなのだろう。この喫茶店のインテリアも、職人技に支えられた端正で優美なデザインでまとめられていた。アーケードに面する正面は、大きなガラス面と鉄

製のフレーム、そして、赤と白の2色に貼り分けられたタイルの、モンドリアン風の幾何学的なデザインだが、ガラス越しに店内に見えるのは、吹き抜けの天井から吊られたらせん階段の柔らかな曲線である。また、その手すりには、素朴な籐が巻かれ、大きな木製の壁面や、やはり村野のデザインした瀟洒な照明器具と共に、店内に優雅さと華やかさを醸し出していた。

次に、家具のデザインを具体的に見てみたい。けっして広い空間ではないが、村野は、この喫茶店を訪れる人々が、思い

思いの場所を見つけて長くそこにどまり、共に憩いの時間を過ごせるように配慮したのだろう。椅子やテーブル、ついたてなどの家具についても、置かれる場所の性格に合わせて数種類をデザインしている。そして、らせん階段の手すりとの調和を意図して、これらの家具にも籐が使われていた。

けっして高価な材料が使われているわけではない。スチールの丸棒とそれに巻かれた籐、クッション、ガラスなどを組み合わせただけの極めて素朴なものである。しかし、村野の手にかかると、その小ぶりのスケールと人を包み込むようなフォルム、思わず触りたくなるような素材感で、人を惹きつけてや

まない独特な存在感を醸し出している。

美術工芸資料館には、この「心齋橋プランタン」の設計図面も約70点が収蔵されており、閉店後の2004年2月に開催した「第5回村野藤吾建築設計図面展」でその一部を展示して紹介する機会があった。収蔵された図面の中には家

具類も含まれている。その上で、実際にその建物で使われていた家具の現物が収蔵されたことの意味は大きい。当然のことながら、建築自体の保存が難しい場合には、家具が、その建築が有していた質感やそれをデザインした建築家のこだわりを伝える貴重な手がかりとなる。また、建築を専門としない観覧者にとっても、身近な家具は、建築家の考え方を具体的な形で容易に実感できる大切な展示品となるからだ。さらに、美術工芸資料館には、他のデザイナーや建築家の家具類も収蔵されており、

そのデザインの違いを通して、建築家・村野藤吾の特質をより深く理解することへとつながる。そして、インテリア・デザインやプロダクト・デザインを学ぶ学生たちにとって、これらの家具類は生きた教材として役立つことだろう。

このような意味からも、そして何よりも人々に愛された場所の記憶を未来へと伝えるという点で、これらの家具は大きな可能性と意義をもっており、これからも、広く家具や照明器具などの収集と所蔵をめざしていきたいと思う。

美術工芸資料館教授 松隈 洋



プランタン心齋橋用パーティション AN.5333 (MB-110)



プランタン心齋橋用椅子 AN.5337 (MB-114)